高校入学から東西線ができるまで

昭和二八年四月、戸山高校に入学した。入学式は運動場で行われ、乾燥ラッキョウというあだ名の校長先生が「生活を簡素にして、高校生本来の勉強に集中するよう」挨拶をし、クラス編成がされてた。当時、アチーブメント・テストという合同選抜方式で入学試験がおこなわれたので、校舎の中に入るのはこの日が初めてだった。式に遅れそうになって、自転車で校庭まで乗り付け、体育の先生に叱られていた飯島という男も同じクラスになった。

数日後、クラブ紹介が行われ、僕は陸上部に行った。しかし、中学の先輩の永山さんに「陸上競技部は人数が少なく、二年生もいない、僕もタッチフットボールを掛け持ちでやっている。人数の多い他の部に行った方が仲間も沢山できて良いのではないか」といわれた。放課後、クラスの隣の席の清水と運動部の練習を見に行った。当時、バレーボールやテニスも専用のコートを持ってはいなくて、ほとんどの運動部がコンクールのように一斉に練習していた。ラグビー部は、野球部のコボレ球の飛んでくる中で、十四，五人が二手に分かれて突進したり、スクラムを組む練習をしていた。一人、場違いの感じのヒロッとしたやせた背の高い一年生らしいのが、一緒に走りまわっていた。先輩と三年生がそばでコーチをしていた。中の二，三の人が寄ってきて入部するよう勧められたが返事をしなかった。翌日の昼休み、昨日の一年生、小池誠吉という男と二年生数人がラグビー部へと勧誘にやってきた。明くる日にもやっ

てきた。数日後とうとう練習に参加してみることになってしまった。当時部室はなく、校庭の南西の隅にある古い物置みたいな小屋で、各運動部がみんな着替えるのです。あちら、こちらにセメントや石灰の粉がこぼれ、汗と黴のにおいも加わり、ものすごい臭いのするところです。渡された練習用のユニホームも湿っぽいにおいのタップリついた大変な代物でした。小川さんという人が「これを上下とも素肌に着るんだ。」といいましたが、しばらくは身に着けられませんでした。グラウンドでは「セー、レー、ワン、ツー・・・・ハッー」と妙なかけ声が聞こえ、それに併せてドタドタ走ったり、止まったりしている一団や、野球部もいました。同級生の清水がその後ろをモタモタ走っていました。ラグビーの練習は二年生が主体でキャプテンは土肥さん、フォワードリーダーが小田さんで、他に市川さん、竹川さんや伊藤さん、よく怒鳴られてる山口崇さんなどがいました。僕や今井、外間などはフォワード要員にされ、その後入部した大島、記内も、後にバックスにまわった小池も最初はそうでした。三年生の井手さん瀬崎さん、畑さんなどが練習をみてくれていました。思うように動かぬ楕円のボールを必死でおいかけ「グラウンドで歯を見せるな。」「練習中は踵をつけるな」と怒鳴られ、ランパス、スクラム、コンビネーションと型どおりに練習をこなして行く、一時間もすると目が回り、足はフラフラ、自分が何をやっているのかわからなくなる。「練習おわり」「グラウンドまわれ」の声をひたすら待ちつづけた。校庭の隅の水道で顔と身体を洗い終えると一年生にはボール磨きが待っていました。当時、四枚革張りのラグビーボールは大変高価で、ラグビー部には四，五個しかありませんでした。これを二年生の指導でピカピカに磨きあげるのです。「布団に持ち込んで、寝られる位、綺麗に」がモットーでした。記内などは、ドリブルの感覚も良くなると、本当に家に持ち帰って、布団に持ち込んだようでしたが・・・・。

五月の末頃、新入部員歓迎コンパが諏訪神社の手前隣りの蕎麦屋の二階でありました。親子丼と二人に一本のサイダーがでました。この日で、現役をあがる三年生は大いに意気があがっていました。旧制高校や旧専門学校の寮歌が歌われ、「一月や、嫌がる娘をつかまえて・・・・」などという変な数え歌が唄われたのが妙に印象的でした。夏休みの後半、校内練習のスケジュールがあり、強い日差しをさけてか、午後三時からの練習でした。そのある日、グラウンドの片隅にいかつい身体の坊主頭の先輩が、松葉杖をついて立っていました。全員を集め「今日から、戸山の練習はオレが見ることになった。二七年卒業の牛山だ。」といい、「サイドステップ踏みながら、後ろに下がるのなんか、ラグビーではない。ラグビーは突進、前進あるのみダ。今日からオレが鍛え直す。」と全員の目をのぞき込むようにしました。土肥さんはじめ、バックスの竹川さんや、伊藤さん、元井さん、同期の渡辺、上野、佐野なども黙っています。練習内容はガラッと変わりました。この頃には、一年生の我々も身体がなれて、大分、楽になったようだったのに。その初日、上野と記内がフラフラと倒れかかって、頭から水をかけられました。「ラグビーは女学生のお稽古じゃない。勝たなければならぬ、勝てるラグビーには俺がする。」ものすごい鬼コーチ牛山正明さんの登場でした。小池の話によると明治大学のホンチャンらしい。「でも、年がそんなに違うわけでなし、仲良く行こうヤ」とも云ってくれましたが、最初は恐ろしいことでした。「グラウンド回れ、ホッイッスルが鳴ったら、一番うしろの者はダッシュして先頭に立つ、他の者も次の笛まで、勿論ダッシュ」これが「牛山流ピー」です。これも何周すれば終わるのかはわかりません。チョッとピッチが落ちれば声がとんできます、山口崇さんや大島がドタドタ走り始めると、ひときわ大きな声がとびます。バックスとフォワードに別れてからも同様しぼられます、「ヨウシ身体のばせ、グ

ラウンドにねろ」休めるかと思えば腹筋運動でした。九月、法政一高戦に大敗したあと、「保善高校と毎週練習マッチをやる。しっかり走れ、モタモタしているとグラウンドを占領されるぞ」と尻をたたかれました。新井先生に引率されてやって来る保善チームは五十人以上、学校から走ってきたというのに、息も乱れていません。「同じ高校生だ。恐くない。頭を低くして前へでろ、まえだ！」と牛山さんはハッパをかけます。でも、前年全国大会出場の保善高校です。第一回は散々にホンロウされつくしました。練習マッチや合同練習をかさねて、いくらかなれたと思ったら「そのうちに、大学チームの二，三軍相手に練習マッチだ。頑張れヤ」の一言、まあ、恐ろしいひとだ、上級生の長谷川さん、市川さんまでが恨めしそうな目でみつめていました。秋の大会の直前の日曜日、高井戸の日大グラウンドに連れて行かれました。お宅が近くの岩切先生も子連れで見学でした。この日の結果も散々でしたが「ラグビーづれした大学生相手に、結構前に出ようとの意欲が出てきた。」とのことでした。帰りは高井戸駅近くの銭湯によりました。僕は眠ってしまった先生の坊やを交代で背負いながら歩いて行きました。あの日坊やに、背中にオシッコをかけられたのは誰だったかなァ。

ブルーアンドライトグレーのジャーシーを貸与され、我々もゲームに出してもらえるようになり、秋から冬になりました。当時は、三学期の体育実技はラグビーでしたし、校内ラグビー大会や新宿区内高校ラグビー大会もあり、結構人気のあるスポーツでした。そんな中で新人大会がはじまり、初戦は荏原高校相手の雪中戦でした。目白の学習院グラウンドで渡辺が同期生で初めての公式戦でのトライをし、六対０で勝ちました。でも牛山さんは、「あれはセンターの持ち過ぎだ、ウイングまで回して真ん中でトライしろ、ラグビーはチームでやるものだ。」とのことでした。みんなドロドロになり、勝利の味を

かみしめながら、川村学園うらの銭湯にむかいました。この頃、どこの銭湯でも、ラグビーの選手は番台を通らず、脇から入って、庭先に用意された盥で身体を綺麗にしないと入れて貰えませんでした。脱衣場に上がると大島や外間が縮んでしまったストッキングがぬげずに大騒ぎをしています。今井と記内が大声で話しています。勝利の味は格別だったのです。（あと三点はボールを持った今井を御輿のようにゴールに担ぎ込んだもの）その後、都立高校の中で強豪だといわれる千歳高校に勝ち、青山高校には同点だったけど、トスで勝ちました。

「パスとかスクラムなど昼休みに練習せい」と牛山さんにいわれ、三時限終了後に弁当を食べ、練習着の上に上着を羽織って授業をうけ、昼休みをフルに練習できるようにしました。だけど、練習終了後は早メシをしているので、モーレツに腹が減るのです。諏訪神社の前のラーメン屋で誰かがチャーシューも鳴門巻もいらない、麺とスープだけでいいから、三五円を二十円にしてくれないかといいました。そのうち、全員がそうするようになり、気の良い小母さんを困らせたりしました。お金のないときはなど十円のコッペパンを半分づつ分けて食べたりしました。

二年生になった五月の関東大会出場がきまりました。先輩たちは創部五年目の快挙だと喜んでくれましたが、まだ大学生の人ばかりで寄付はあまり期待できませんでした。顧問の岩切先生と主将の土肥さんが学校に交渉し、四千円出してもらえることになり、のこり八千円は全校生徒からのカンパが集まりやっと遠征できました。先輩の牛山さんや井手（正敬）さんも同行してくれ、上州名物だといって焼き饅頭などを差し入れてくれました。大会は前橋市の敷島公園で五月二日開会式、地元高校のブラスバンドの演奏で入場行進をしました。戸山高校チームは校旗もなく、校名プラカードだけを持っての行進で

した。でも、みんな元気に胸を張って歩きました。翌三日、群馬県の高崎高校と対戦、雨の中でバックスに回すボールに手がつかず、後半ドリブルやショートパントで前に出るよう切り替えたが、どうしても点がとれず、八対〇で負けました。試合終了後、先輩方好意の上州名物の焼き饅頭をご馳走になり、すぐ帰京しました。高田馬場駅で下車した際、同行の記内が切符を無くしてしまって駅員に散々、油をしぼられました。

秋、新しく箕岡や渡辺幸男を加わり、一年生の柿木、元井や山本も力をつけてきました。新聞部と掛け持ちの箕岡たちは一年生からはじめた連中とは体力の差もあり、随分厳しく絞られたようです。フルバックをやることになった箕岡はパントを「あと、五十本」とか「ボールをキャッチした後のスタートが悪い」と居残り練習をベソをかきながら、やらされていました。僕等は帰ることもできず、脇でランパスやブレークアップとかで彼を待つのです。

新宿区内高校ラグビー大会でシーズンが始まりました。先輩たちはソコソコの成績で修め、全国大会の予選に臨もうという算段だったらしい。しかし、渡辺キャプテンに変わり、フォワードとバックスの連携がわるく「フォローしたフォワードにたまにはボールを回せ」、「センターが性急にトライしたがりすぎる。ウィングを走らせろ」「フォワードはついたら、声を出せ」とサイドから声がかかりますが、動きは鈍く、早稲田高等学院に負け早稲田高校にも負けてしまった。その年の暮れ、西穂高の遭難事故で今井を亡くした。でも、練習と空腹の厳しさは相変わらずだった。その頃、春休みには合宿はなかった、午後の練習だけだったので、数学に自信を失っていた僕は、その再構築に藤森栄蔵先生の塾に通うことができた。四月はじめ、東伏見の練習に誘われて二回ほど行き、保善の北岡というバックローとコンビ

ではしりました。「それなら、八幡山に来い」とも云われましたが、とうとう機会がありませんでした。憲法大会では準々決勝で保善高校とあたり負けましたが、小池からのリターンパスを受けて走りました。思いっきり走れた気がして満足でした。

社会人三地域対抗大会が秩父宮ラグビー場で行われ、前座の都内高校選抜紅白戦に小池と一緒に出場できた。芝生のグラウンドの感触は素晴らしく、何がなんだか解らぬうちにボールが廻ってき、走り、倒されて三十分は過ぎってしまっていた。（前半、後半メンバーの入れ替えがあったため）観覧席の前の方に何人かの友人が声援にきてくれていた。女性も二人、周囲をはばからぬ黄色い大きな声がきこえた。赤ん坊の頭ほどのオニギリを二つ持ってきてくれました。一つでイイヨといったら、小池が脇から手をだしてあっという間に食べてしまった。「私が一生懸命作ってきたのに、」とあごの小さな顔をふくらませた人は一年先輩でしたッケ。ラグビーの試合があると応援にやってくる女子グループが二つあって、「西穂高のアクシデントのお手伝いグループ」でした。大下由宮子といって、佐藤滋子、鈴木博子さんなどが一緒でした。最初は応援の声だけでしたが、そのうち「オニギリ」やサンドイッチを作ってくるようになっていました。

受験勉強に専念するため、五月の憲法大会で僕らの代は引退しました。

スクラムをくんだ友の熱気、「バン」「クリ」の一声で後ろが誰かを見極める連携、あの頃、お互いに血が通い合っていたのではないかさえ思えます。部室とジャーシーの独特の臭いさえ、懐かしく思えるこのごろです。何事にも燃えない、濃厚な人間関係を避ける、飽きっぽい現代の若者たちには泥臭いキタナイ、スポーツにしか見えないのだろうか。戸山高校ラグビー部も人数が減り、寂しくなったと聞いて

いますが、あの熱気や感激を今の若者にも味あわせてやりたいものです。

三年生の春の遠足で「扇山」へいった時、走って登ったの悪かったか、体育の授業でタッチフットホボールでのブロックされたのが原因だったのか、高熱が続き動けなくなりました。診察を受けると「湿性肋膜炎」とのことで、学校も休学しました。勉強に追われていた友人もほとんど訊ねてきてはくれず、わずかに、大下さんが「浪人は暇だし、ご近所だから」といって新聞紙に包んだ卵とか、「桃」とか、授業のノートを運んでくれるだけでした。後できくと箕岡君や大貫君たちも何回かきてくれたが、我が家の住宅事情がゆるさず、上がってもらえず、かえってもらっていたとのことでした。

外出の許可がでたのが八月の半ばすぎで、九月に復学するのは体力的に無理とのことで留年にきまりました。大下さんは進学適性検査をうけて、早大受験を薦めます。彼女は男の子のような強引さでそれをしきりにすすめて願書までそろえてくれました。でも、僕の家の事情で授業料のやすい公立しかねらえなかったのです。当時、戸山町に住んでいた彼女は気が向くとよってくれるのです。いま、有楽町で上映されている「エデンの東」という映画が面白そうだとか、「天と地の間に」というフランス映画がよかったなどとりとめのない話をして、「クリ、じゃあネ」と帰って行きます。休みに青森に帰っても、すぐ出てくる人でした。実家には「野球好きで、高校野球の大御所」のお父さんしかいないので、娘の話をあまりきいてもらえなかったのかもしれません。このお父さんは八戸高校の監督さんを務めている方でした。戸山高校のラグビーの仲間たちに彼女は、故郷のことを重ねていたのかもしれません。そんなことが何回か続き外でも会うようになりました。山口　崇、野口武彦、神　正君とか、早稲田の文学

部に進学した連中の噂も運んでくるのが、常でした。家の周囲では道路を隔てた向かい側や、八幡坂下の高等学院入り口付近の区画整理が始まり、馬場下の全部がほこりっぽい、落ち着きのない町になってしまっていました。「学院」と親しまれた高等学院は石神井へ移転して（昭和三一年　一九五六年）とりこわしの最中だったせいかもしれません。一方、七五周年記念会堂の建設も始まっていました。大通りに地下鉄を掘ることが決まったとか、国立病院の西側から戸山ハイツを通り都電通りに抜ける大きな道路がでるとか、国立病院を大学が買収だとかの話が飛び交っていました。大隈講堂、正門付近も区画整理やバラックの立ち退きが進み「第二学生会館」の建築が始まっていました。突然のように成木屋菓子店や吉村薬局が真新しく建て替えられ、早稲田実業方面に新しい道路が抜けて、都バスがこちらを通るようになりました。

大学のなかでは、「学バス値上げ反対」「第二学生会館管理権」を巡って、学生たちが結束して「ピケ」を張るまでになってしまっていました。学生たちは大學の周辺にすんでいて、日米安保条約は米軍の日本駐留を固定化し、当時の冷戦構造のなかに日本を引き入れ武力衝突の危険性を激化するものとして「六〇年安保闘争」が火を噴き、学生運動が活発化してゆく中で「文学部」が戸山キャンパスに移動してきました。馬場下女子大と「カゲロ」をいわれるほど華やかな学生があふれるようになって行きます。マスコミで「女子学生某国論」を唱えた先生もいましたネ。

また「中核」「核マル」が対立、先鋭化して「破壊活動防止法反対」や「スエズ紛争介入反対」「ベトナム戦争反対」を唱えるようになり、一般学生は距離をおくようになってゆきました。

第二文学部に、映画「キューポラのある街」でブルーリボンを獲得した「吉永小百合」さんが入学した

のもこの頃のことです。学生運動のスターもいました。初期の野口武彦や大口昭彦などの大物もいました。六五年の「学費値上げ反対闘争」など数千人規模の学生たちが一夜で集まりました。大學側は「警察官導入」ロックアウトで対抗してしまったのです。周囲の商店街は大迷惑、機動隊と「デモ隊」の押し合いが続き、一般のお客様も寄りつきません、貧亡酒屋の我が家では一日売上がないとお金が回らず大変なのです。「地下鉄工事の人たち」と「三朝庵」の学生コンパがたよりの営業でした。当時の学生たちの楽しみのひとつが「コンパ」だったのです。お酒を飲んでも、飲まなくても肩を組み手をつなぎ、古い寮歌や「うたごえ」を大きな声で唄い青春を満喫していたのです。大学周辺のそばやの二階には必ず大きな座敷があり、「学生コンパ」やご近所の「無尽講」まで大にぎわいでした。

一方、地下鉄工事の人たちも、現在と異なり人数が多く、「飲んべえ」が多かったのです。娯楽が少なく、テレビもまだ白黒の時代でした。休日にゆく映画館も東映の時代劇とか日活の活劇映画の時代でした。「エデンの東」のジェームス・ディーンや「波止場」のマーロン・ブランドも騒がれました。プレ・ビートルズの時代でした。

テレビやパソコンはもちろんラジオを持たずに狭い三畳か四畳半に下宿して学生時代をすごした世代は六〇年安保、学館闘争や学費値上げ反対闘争をくぐり抜けてきた世代でもあります。

一方では東京五輪を控えて建設ブームで新幹線や高速道路が開通、ちかくでは東西線と名付けられた地下鉄が「高田馬場」「九段下」で折り返しが始まった頃でもありました。海外旅行も自由化されそれを景品にした商品が続々と発売され人気を呼びました。なかでも「トリスを飲んでハワイに行こう」のコマーシャルが人気を呼びました。